



創立100周年を機に変わる学校。 誰かに強いられるのではなく、 自ら“学びをたのしむ”人に

言語技術教育と国際教育の 二つの柱で学校が変わる

創立100周年にあたる2022年、本校は大きく変化しました。同年生まれの子どもが高校3年生になる2040年を見据えた教育指針“RISEI VISION 2040”の下、「知識をスキルへ」「国語を言語技術へ」「ティーチングからコーチングへ」を掲げ、改革を進めています。このうち言語技術とは、読む・聞く・書く・話す・考えるの5技能を学ぶ、欧米では一般的な母語教育のこと。頭の中の漠然とした思考を言語化し、相手に伝わるよう表現することに重きを置いた実践的な教育です。本校では2年前に学校設定科目とし、つば言語技術教育研究所の三森ゆりか所長の指導の下、約60時間の研修を受けた20人の教員を中心に、中学校と高校の一部クラスでカリキュラムを展開しています。私自身3年前、先陣を切って、大阪から茨城県まで週末4往復して受講するなど、定年を意識し始めた年齢での新たな挑戦でした。同教育はすべての教科のベースとなるため、数学から芸術科目まで担当者は多岐にわたります。体育も然り。本校には卒業後海外で活躍するアスリートもいますが、言語の壁以

上に思考の壁があると聞きます。論理的に考え表現する技術の習得が、国際的な素養を身につけることに繋がると期待しています。

スパルタ主義から転換し 学びをたのしむ学校に

本校に“スパルタ主義”というイメージをもたれる方もいるかもしれませんが。確かに放課後遅くまで補習を強いたり、私自身「楽しむのは大学に入ってから」と生徒をけしかけていた時代もあります。しかし2022年を境にそのスタイルも一新しました。“学びをたのしむ”を合言葉に、部活動と専攻ゼミ(国公立/医学部進学ゼミ、グローバルゼミなど)を生徒がアレンジする自由選択制へと変えました。

ただし、そのことで「厳しい学校だったけどラクになった。それでいて進学先も保証してくれる」と誤解されては困ります。“学びをたのしむ”とはラクして学ぶことではありません。こうした勘違いは、「楽しむ」という言葉に「楽」という漢字が使われていることが一因かもしれない。そう考え、入学式など折に触れ、こんな話をしています。「たのしむ」とは努力の先にあるものだし、苦勞を伴うもの。ただし、人から強制された苦勞では、いつまでたっても苦しいまま。だが

ら自ら立てた目標に向かい、辛い努力も込みで学びをたのしんでほしいと。

このメッセージは教員にも向けられています。私は履正社に籍を置く35年の間、中高を歩き来してきました。しんどいこともありましたが、6カ年特進コース(現 学藝コース)の立ち上げなど節目節目で新たなことに挑戦してきました。上司や法人に耳障りなことも口にする使いにくい教員だったと思います。そんな私が今年度、高校の校長に指名されたのは、中学校で成果を出している言語技術教育を高校に広げるとともに、RISEI VISION 2040にも示された、探究的な学びの充実やICTの普及、国際教育の導入などを推し進める役割を担うこと。またその前段として、チーム力を発揮できるような教員の意識改革、働き方改革も期待されたことだと思います。困難も多いでしょうが、生徒と、また苦樂を共にしてきた仲間と共に、新しい学びをたのしみたいと考えています。

しのおか・まさかず / 1966年生まれ。関西大学文学部教育学科卒業。私立高校で2年勤務したのち1990年履正社に。以降、国語科教諭として中学部および高校部で担任、学年主任、6カ年統括主任などを務める。2023年中学部学藝コース教頭。中学部・高校部副校長を経て、2025年より現職。2023年導入の学校設定科目「言語技術」も担当。

履正社高校
 (大阪・私立)

1922年創立。建学の精神「^{りせいふ}履正不^{きん}畏」「^{きんろうあいじょう}勤勞愛好」「^{ほうほんはんし}報本反始」を基に、知育尊重、人格陶冶の教育を行う。近年、言語技術教育と連動した国際教育にも力を入れ、学術基盤センター(2024年設置)の多言語多文化教育部を拠点に留学生の受け入れや、海外大学進学プログラムを推進。設置コースは「学藝コース」(S類、I類、II類)、「競技コース」(III類)。強化クラブを中心に運動部は全国レベル。